

志賀直哉全集

第四卷

志賀直哉全集

第四卷

第六回配本（全十四卷・付別巻）

昭和四十八年十月十八日 發行

定價 二千四百圓

著 者 志 賀 直 哉

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

萬曆赤繪	一
池の縁	一九
赤帽子・青帽子	二一
ジイドと水戸黄門	二四
池の縁	二八
日曜日	三一
朝晝晩	四三
朝	四五
晝	四九
晩	五四

菰	野		六一
颯	風		七九
無	題		八七
ク	マ		九七
鬼			一一三
病	中 夢		一二一
蟲	と 鳥		一二五
早	春の旅		一二九
馬	と木賊		一七一
淋	しき生涯		一七五
灰	色の月		二一一
兎			二一九

玄人素人	二二五
蝕まれた友情	二三三
猫	二八三
豫定日(會話)	二九五
實母の手紙	三一九
動物小品	三三五
蝦蟇と山棟蛇	三三七
子雀	三四〇
樂屋見物	三四三
秋風戯曲	三五一
奇人脱哉	三六九
末っ兒	三八三

山鳩	三九三
目白と鶴と蝙蝠	三九九
昨夜の夢	四〇九
妙な夢	四一三
朝の試寫會	四一九
自轉車	四三五
朝顔	四五一
いたづら	四五七
——野尻抱影君に——	
鴉の子	五二三
草津温泉	五一七

六里ヶ原 義太夫 歸途 二度目の草津 博徒の親分

夫 婦	五三一
祖 父	五三七
白 い 線	六〇一
八 手 の 花	六一一
待 合 室	六一七
盲 龜 浮 木	六二五
輕 石 モラエス クマ 一體それはなんだらう	
〔草 稿〕	六四九
春の散歩〔日曜日〕	六五一
菰野〔A〕	六五五
菰野〔B〕	六六五
菰野〔C〕	六六五
〔菰野〔斷片〕〕	六六六

廳 風	六七二
〔灰色の月〕	六七七
樂屋見物〔A〕	六八二
樂屋見物〔B〕	六八三
〔樂屋見物〕	六八四
惡戲〔A〕〔いたづら〕	六八六
惡戲〔B〕〔いたづら〕	六八八
からす〔鴉の子〕	六八九
〔盲龜浮木〕	六九一
後 記	六九一

萬曆赤繪

京都の博物館に一對^つになつた萬曆^{ばんれき}の結構な花瓶がある。京都府本能寺寄託、鳳凰色繪花瓶^{ほうわういろえ}とあるが、山中商會^{なか}あたりの目録だと、大明萬曆五彩龍鳳尊^{たいみんばんれきさいりゆうほうぞん}などと物々しく書かれる品だ。私には十數年來の馴染である。一對の一方は眞中から上が一方に傾き、これは焼いた時の曲りで、新しい物なら撥物^{はねもの}だが、此時代のものゆゑに其儘珍重されてゐる。現在も坐りの悪いところから、黒絲で兩方へ引張つてあるが、何時の時代にか倒した事があるのだらう、口の部分の中程がぼつかり破れ^わ、あとが漆つぎで赤く一線になつて残つてゐる。

同じ室^{しつ}に「萬聲」といふ銘の山科毘沙門堂出陳^{やましなびしやもんどう}の青磁花生^{せいじはな}がある。これが砧^{きぬた}を立てた形で、此色の青磁を一ト口に砧青磁といふ位で、茶人や骨董屋の標準では恐らく最高の花瓶であらう。が、私は寧ろ前の萬曆赤繪^{ばんれきあかえ}に餘計親しみを感じてゐる。

或時、私は梅原龍三郎^{うめはらりゅうざう}の家で萬曆の花瓶を見せられた。勿論、本能寺所藏の品とは比較にならなかつたが、美しいものと思つた。幾つにも破れたのを漆で修繕してある。柳宗悦^{やなぎむねよし}の説では萬曆と云へない事もないが、と疑問にしてゐたさうだ。梅原自身も感じが少し弱い事を認めてゐた。梅原はその花瓶でばらの美しい繪を作つた。その繪は現在私の書齋にかけてある。

それから幾月か後のことであつた。大阪の山中商會から支那古陶金石展觀の目錄が私の所に届いた。毎時山中から目錄を貰つてゐるが、私は一度も山中で買物をしたことはないのだ。だから單に美術愛好者といふやうな意味で呉れるのだらうが、私も三度に二度位は屹度見に出かけた。

「これから大阪へ行くが、行きたければ連れて行つてやらう」さう私は私の家内に云つた。

「大阪は何所？」

「山中の展觀だ」

「面白いかしら。又布類なんか出てゐるでせうか」

「古陶金石といふのだから、布類はないが、萬曆の花瓶がある」

「さうね。まあ、今日はよしませう」

「何故。かへり今橋の伊勢屋へ行かう」

「いや／＼。此前みたやうにお勘定書を見て、しよげたのでは幾らおいしく頂いても、つまらないわ」

「あの時は晝めしをぬいて行つて鰯腹食つたから高くなつたのだ」

「兎に角、今日は失禮致します」家内は切口上で、頭を下げた。

「そんなら、アラスカは？」

「いくら餌さをつかへても釣られないことよ」

「一人で出かけて高いものを買つて來ても知らないぞ」

「買ふお金があつたら、買つていらつしやい」

所で、其日私は萬曆の花瓶ではないが、結局財布以上の買物で馬を引連れて歸つて來た。

然しそれは後の話にして、大阪淡路町あはぢまちの美術俱樂部へいつたのは三時過ぎ、秋の曇日いづみで家の中にはもう電燈が點いてゐた。大勢來てゐた。客にまじつて骨董屋の番頭達も大勢ゐた。禿頭に薄い毛を被せた年配のもの、黒い髪を油でなでつけた若い好男子のもの、何れも身綺麗な風をしてゐた。つまり彼等にとつては入札とか展觀は晴れの場所なのだ。それに較べると身なりは客の方が寧ろ無難作だつた。これぞと思ふ品の前でいち／＼老眼鏡をかけ、覗込んで見てゐた半白の脊の高い男などは不斷着に羽織だけ更へて來たといふ風だつた。足袋までは見なかつたが、これで足袋さへ綺麗なら風俗として却つていいものだ。尤も讃めてからは云ひにくいが、これは私自身であつたかも知れない。

さうでないのもある。大阪に親の代からの家があり、現在では蘆屋あしや、御影邊みかげへんに大きな別莊を作つて住んでゐるといふやうな金持風の夫婦者などには骨董屋が主人と細君とに一人づつついて説明してゐた。かういふのは主人が肥つてゐると細君の方が瘠せてゐるし、主人が瘠せてゐると細君の方がでつぷりといひ體格をしてゐるのが多かつた。細君はもう若くはないが、二タ重あごで可愛い顔をしてゐる。英語で Well-
fed——此感じは悪くない。細君に苦勞をかけてゐないといふのは兎に角いい事の一つだ。

第一室は康熙、乾隆、嘉慶のもの、殊に官窯といふものには技巧の繊細を極めたものが多かつた。これらは私には分らない。謙遜して云へばさうだが、正直に云へば下らないと思つた。後で聞いた話だが、或る陶工が、三千圓やるからかういふ物を作つて呉れと云はれても作る氣にならぬ。何故なら、完全な一つを得る爲めには何十と同じものを作り、中で一つ得られるかどうか分らない。それでは商賣にならないと云つてゐたさうだ。織物の龍村平藏氏が北平へ行つた時の話で、康熙、乾隆時代の織物には別に驚かなかつたが、陶器には驚いたと云つてゐた。私はそんなものかと思つた。尤も龍村氏も「それを好むと好まぬは別の問題ですが」と云つてゐた。私は好まぬ上に、その驚くべき技巧といふものにも甚だ懷疑的であるから、其後、北平の武英殿でそれらの逸品を澤山見せられても何の感動をも受けなかつた。

西洋人が甚く珍重するといふ古月軒の鉢があつた。——これは武英殿ではなく此展觀の話だが——梅の一枝を描き、それに讃がしてある。繪がうまいだけに、繪として見るべきか、陶器として見るべきか何方つかずだ。陶器として見るなら、もつと陶器らしい繪の方がよく、繪として見るなら、紙に描いた方がよく思はれる。要するに紙に描いたやうに陶器に描いてあるといふ點を珍重すべきだらうが、その事に興味がないと、これは甚だ無意味なものになる。そんな事は一つの藝當に過ぎないからだ。

第二室は階下の大廣間で、中央に低い臺を据ゑ、その上に紺毛氈を敷き、周銅、漢銅の類が並べてあつた。大きい床の間にも眼ぼしい銅器が幾つか置いてある。そして座敷の壁より一列に明代の陶器が並べ

てあつた。私が目的として來た萬曆赤繪である。然し私の眼はそれよりも先づ銅器に惹かれ、いささか壓倒された。その紋様の野蠻なこと、そしてその如何にも奇怪なこと、まことに驚くばかりであつた。總てが實に強く、それは寧ろ無遠慮過ぎた。私はかういふ器物を日常に使用してゐた人間の生活を想像し、不思議な力を感じ、同時に恐しく感じた。が、實をいへばさういふ人間の生活を如實に想ひ浮べる事は今の吾々の生活では不可能としか思はれなかつた。唐、宋、元、明、清、それらの器物で大體それを使用してゐた人間の生活は想像出来る。現に第一室の康熙、乾隆の物を見て同感出来ないのは物それ自身に感服しない半面に、かういふ物を喜んでゐた人々の生活に對する多少の反感も加はつてゐるかも知れない程、その年代の人々の生活は器物から如實に想像出来た。ところが、周銅ではそれが全く出来ないばかりか、物自身には心を惹かれつつも、その爲め、何か親めなかつた。様子の知れない不安だ。私は不圖、これがいきものだつたら大變だと思つた。これは魃だ、そんな事を思つた。

私は又、その紋様の彫りに何かしらブウルデルの篋跡と共通なものを感じた。

扱て、いよ／＼目的の萬曆を觀ることにするが、然し私は周銅で少し疲勞した。萬曆のものは陶器としては感じが強く、さればこそ、古銅器と同じ室に並べられてあるのだらうが、銅器のあとではほつと息の安まる感じがした。叮嚀に一つ／＼見て行つたが、いくら萬曆でも欲しいものと、欲しくないものとがあつた。それに何れも完全過ぎて、我等の手には合ひさうもなかつた。五彩龍鳳尊といふ紙札のついたのに

二ついいのがあつた。一つは高さ一尺六寸、もう一つは一尺二寸八分で、あとの方が形は整つてゐた。紙札の裏を返して見ると金壹萬圓とある。然し私は何方かといへば餘りに整つたこれよりも前の一尺六寸といふ方が好きだつた。口と胴の間に薄く所謂ニウが見えてゐる。これは金八千圓。兎に角高價すぎる。此價が一ト桁下であつても買ふ能力があるかどうか分らない我等には一つそ思ひきりがよかつた。私は前に欲しいと思つて買ふ事の出来なかつた石濤の或る畫冊を憶ひ、油繪では俗伊之助君に勧められ、これも金がなくて買へなかつたコロの小さい風景畫を想つた。萬曆赤繪もいいが、こんな高價なものならば勿論自分は石濤、コロの方を採ると考へた。豫想の違つた負惜みかも知れない。

大體かういふものの觀賞で、所有慾を全く離れると觀賞は少し蕪雜になるかはり、長閑な氣持で見られる。執着の度が強ければ、こんな事ででも苦しくなる。それ程までして欲しいとは思はぬ方だ。

私はゆつくり、それから次ぎ／＼の室を見て廻つた。漢甃、六朝佛、唐三彩、宋窯。宋窯では磁州窯、繪高麗に近頃の陶工の作るやうなものがあつた。

支那のかういふものの觀賞も漢甃まで行つて、行止りで初めて満足するものらしいと云つてゐた人があつた。私達の中では武者小路が甃に興味を持ち、私も屹度興味を持つに違ひないと云つてゐた事がある。然し私は未だ甃には興味がなく、従つて、餘り叮嚀に見たこともないが、甃の觀賞には只觀るばかりでなく、懷に溫めて置いて、時々出して愛撫する快感などいふ、他のものとは又別な樂みがあるとのことで、若し